

## 医療ルネサンス

No.7418



## 転機の災害医療

## 薬2000人分さばききれない

集団感染が起きたクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」へ、災害派遣医療チーム(DMAT)が本格的に入ったのは2月8日朝。多くの病院がチーム派遣をためらうなか、集まったのはベテランばかりだった。

福島県立医大の島田二郎(59)は当初、船外の対策本部を手伝うつもりが、急ぎよ乗船することになった。事務局が人集めに苦労する様子を目の当たりにし、断れるはずがなかった。横浜港の大黒ふ頭に集合すると、災害現場でなじみになった顔が見えた。済生会横浜市東部病院の山崎元靖(50)。ハイタッチで再会を喜び合った。

「豪華客船にタダで乗れるなんてラッキーだな」。島田は心にもない軽口をたいた。「決死の覚悟みたいな雰囲気があった。DMATは感染症に慣れている

わけではない。冗談でも言っておいて気持ちを高めずにはいられなかった」

島田はPCR検査の検体を採る班、山崎は薬を配布する班に分かれた。

船内に感染者が出たことで、政府は乗客乗員を船に留め置いた。5日からは乗客の自室待機も始めた。検体採取班は、発熱している人の部屋を回り、のどの粘液を採る。リスクの高い作

業だ。全身を覆う防護服に、マスクと手袋。暖房の利いた船内では、2時間もすれば汗だくでくたくたになる。

島田の受け持ちは船底にある乗員の部屋が多かった。窓のない部屋に2段階ベツド。「客室に比べると極端に狭く、換気も不十分な気がした」。中には、発熱していても仕事を続け、部屋にいない乗員もいた。「これでは感染が広がってしまつのではないか」。島田は危惧を覚えた。

で、持病の薬が切れた人が続出していった。薬名が書かれた紙が約2000人分。処方箋ではなく、乗客の手書きだ。記載が不確かなメモも多い。「医療用麻薬の量が10倍になっているものもあった」

急を要する薬を選び出し、届ける優先順位を決めていく。徹夜で取り組んでも、隊員7、8人ではとてもさばききれない。まだ船に届かない薬もたくさんあった。船側には乗客から問い合わせが殺到し、船長らの非難は隊員に向いた。「薬がない」と書かれた旗を窓から外に掲げる乗客もあり、国内外で盛んに報じられた。

山崎は「自分が世界中から非難されているような気持ちになった」という。「ウイルスよりも、社会的、心理的な闘いのほうがずっときつい」。後になってそう気づいた。(敬称略)



船内では、5階の食堂に当たる場所が対策本部となった(利根中央病院の鈴木諭医師提供)



\*過去記事はヨミドクターで